

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第十八回 ミッドフォード『英国外交官の見た幕末維新』(下)

「維新の当時の英雄の中で、最大の賞賛と尊敬を受けるべき人は天皇睦仁であった」

ミッドフォードは、明治天皇が少年期の頃から、謁見の機会を得ることができた数少ない外国人の一人でした。最初の謁見は、慶応四年(一八六八)三月の京都御所にて。彼は御所の立派な様子に感動しています。

「天子様の宮殿は、『東洋的な華麗さ』という言葉がよく使われるように、外観を派手に飾り立てることの好きな普通の東洋の有力者の屋敷と違って、気高く簡素な造り特徴である。特に防備は施されていないが、灰色の瓦をのせた白塗りの壁

で取り囲まれていた。そこには九つの門があり、前述したように、ある大名の軍隊がそれぞれ警備の任に当たっていた。それは不自然なほど簡素であったが、御所はそれ自体がもつある威厳を備えていた。場所の制約は常に見すばらしい結果を生むものだが、ここではそれが全くなかった。中庭は広々として美しい白砂が細心の注意をもって整然と敷き詰めてあった。建物は普通の形だったが、全く飾りがなく、大きく広々として威厳に満ち、それが大きい特徴になっていた」

この時、フランスやオランダなどの各国大使が明治天皇に謁見しましたが、パークス公使をはじめとするイギリスの三人の外交団は、参内途中で刺客に襲われ、三日遅れで明治天皇に謁見しました。しかし、謁見を許されたのは、パークス公使とミッドフォードだけで、有名なアーネスト・サトウは、外交団の中で一番重要な人物でしたが、宮廷での経験がなかったため、礼法に従い、謁見が叶いませんでした。

少年期の明治天皇について、彼が残した記録は非常に貴重なものです。天皇は一般社会に姿を現すことすらなかった特別な存在であり、ましてや外国人が謁見するなんて歴史上まれにみることでした。この貴重な記録を以下、じっくりお読みください。

「我々が部屋に入ると、天子は立ち上がって、我々の敬礼に対して礼を返された。彼は当時、輝く目と明るい顔色をした背の高い若者であった。彼の動作には非常に威厳があり、世界中のどの国よりも何世紀も古い王家の世継ぎにふさわしいものであった。彼は白い上衣を着て、詰め物をした長い袴は真紅で婦人の宮廷服の裳裾のように裾を引いていた。被りものは廷臣と同じ烏帽子だったが、その上に、黒い紗で作った細長く平らな固い羽飾りをつけるのがきまりだった。私は、それを他に適当な言葉がないので羽根飾りと言ったが、実際には羽のような物ではなかった。眉は剃られて額

の上により高く描かれていた。頬には紅をさし、唇は赤と金に塗られ、齒はお歯黒で染められていた。このように、本来の姿を戯画化した状態で、なお威厳を保つのは並たいのわざではないが、それでもなお、高貴の血筋を引いていることがありありとうかがわれていた」

「我々が、その前に立っている君主の祖先は、何世紀の間、国民にとって神に近い存在であり、外国人にとっては神話中の人物であった。彼らは聖なるものとして隔離されて、不犯の生活を送り、世間との交際はいっさいなかった。世の中のこととは何も知らなかった。今や突然に、神殿のヴェールは引き裂かれ、神を守るためには、おおぜいの人民が喜んで自分たちの命を投げ出すだろう、その現人神の少年が雲の上から降りて来て、人間の子と同じ席に着いたのである。そればかりでなく、彼はその尊い顔を人の目に触れさせ、『外夷』と親交を結んだのである。これが当時の日本人の心に映じた率直な事実であった」

「述べられた言葉には、天の御子としての昔ながらの、尊大で、横柄な態度はなかった。初めてのことであったが、女王陛下についても適度の尊敬を籠めて述べられ、二日前に起きた暴行に対する陳謝は適当な言葉で表現されており、儀式全体を通じて、特に儀式にやかましい外国人でも、その感受性を傷つけるようなものは何

もなかった。何世紀の間、何世紀の間、障害は取り除かれて、ここに日本は国際礼讓の場へ諸国と対等の条件で入る準備が整ったのである。……こうして儀式は終わったが、それは、その内容そのものだけでなく、簡素でありながら栄光と威厳に満ちていた点において、深く印象に残るものであった。古くからの伝統と神聖な雰囲気は、きらびやかな王座を飾るインドの王侯の金銀宝石よりも、はるかに人の心を打つものがあつた」

ミッドフォードの目に映った明治天皇の姿はきわめて印象的で、その威厳と神聖な雰囲気が生涯忘れられないほどの感銘を与えたことがよく分かります。

現代人から見れば、なぜ十五歳の少年がこれほどのインパクトを与えることができただのか、と疑問に思うかもしれません。しかし、当時は十五歳といえば元服する年頃であり、立派な大人でした。例えば、幕末の志士で思想家の橋本左内は、十五歳の時に自らの志を綴った『啓発録』を残しているほどです。

明治天皇の場合は、この頃すでに古今集や四書五経など、和漢の古典に通曉していました。特に明治天皇の幼少期は、異国船が頻繁に日本にやってきた時代であり、国家の安危を憂えられる御父・孝明天皇は、伊勢の神宮をはじめ七社七寺にたびたび勅使

を差遣され、国の安泰をお祈りされました。同時に、孝明天皇は毎日のお祭りでも朝夕にお祈りされましたが、『明治天皇紀』には、その際、幼少の明治天皇も一緒に祈りされていたと書かれており、自ずと天皇の天職の何たるかということ、肝に銘じられたのではないかと考えられます。要するに、幼少期から高度な教育を受け、教養も人格も現代人とは比較にならないほど高かったわけです。

その上で、明治の元勳たちは弱肉強食の厳しい国際環境の中で日本が生き残って行くために、明治天皇の君徳の培養・輔導に意を注ぎました。それまでの宮中では、天皇は女官に囲まれた柔和な生活でしたが、西郷隆盛はこれを憂え、親友の吉井友実や旧幕臣の山岡鉄舟などを侍従に据え、輔導に当たらせただけでなく、

その結果、元来の資質はさらに磨かれ、明治天皇は誰からも仰がれる英邁な君主に玉成され、明治の激動の時代を見事に乗り越えて行きます。

明治天皇の存在は、国際的な立場にいた英国外交団の中でも、一際特別な存在となっていました。後にミッドフォードは当時を振り返り、明治天皇に最高の賞賛を残しています。

「維新の当時の英雄の中で、最大の賞賛と尊敬を受けるべき人は天皇睦仁であった」と。